しあわせのオレンジ

藤本金巳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しあわせのオレンジ

【Ｎコード】
Ｎ６３２３Ｙ

【作者名】
藤本金巳

【あらすじ】
猪瀬ハナ。３５歳、独身。半年前に亡くなった祖母の形見のオレンジが、地味なハナを変えていく。

1話

おばあちゃんは、その朝、静かに眠っていた。

夕べはいつもと変わりなく、一緒にご飯を食べた。
私は会社でのできごとを取り留めなく話し、
おばあちゃんはご近所さんの日常を取り留めなく話した。
お互い、いつもの時間にはそれぞれの部屋に引き上げた。

最後に交わした言葉は、「おやすみ」。

そして、いつもの時間に起きてこないおばあちゃんの様子を見に行き、
おばあちゃんは天国へと旅立っていることを知った。

私と、この家と、【オレンジ】を残して。

＊＊＊＊＊

おばあちゃんが亡くなってから、半年が過ぎた。
両親は不仲で、私が言葉を覚えはじめた頃には離婚したらしい。
とりあえず母が私を引き取ったけど、まもなく男と共に行方をくらました。
私は乳児院行きが決定していたけれど、救世主のごとくおばあちゃんが現れ、
以来、おばあちゃんが亡くなるまで二人暮らしを続けた。

おばあちゃんは、華奢で背が小さく、今にも折れそうな身体つきの割には、

ほとんど病気らしい病気をしたことがない。めったに風邪すら引かなかった。
おばあちゃんいわく、「全ての基本は食事から」らしい。
そんなわけで、私も風邪らしい風邪を引くことなく、只今元気に絶賛計算中だ。

「猪瀬さん、それ終わったらこっちの表も集計して。」
「猪瀬さん、さっきお願いした伝票だけど、１５時までに仕上げてくれる？」
「いの・・・・」

う　る　さ　い。

どいつもこいつも、そのくらい、じ　ぶ　ん　で　や　れ！

・・・などとは申せませんので、入行１５年をかけて作り上げた胡散臭いスマイルを貼り付けて、殊勝に返事を返していく。

短大を卒業後、いまいちな出自の割りに地元の銀行に入行できたのは、
おばあちゃんの地元貢献度によるところが大きい。
住むところに困らないとはいえ、生活費は稼がねばならん。
あと２０分で、お昼休みだ。お昼にはお弁当が待っている。
ちなみに今日のお昼は、おばあちゃんの残してくれたオレンジで作った、鶏肉のトマト煮込みだ。

2話

休憩室のレンジで温めなおしたお弁当を開ける。
美味しそうないいにおい。

同期の女子は、私を残して全員寿退職していった。
後輩は外へランチに出かけるが、一緒に行くことはない。
入行したての頃は人付き合いもあって外へ行ったが、
同期が一人減り、二人減りしていくうちに、お弁当派に鞍替えした。

おばあちゃんの影響で、私も料理は苦じゃない。
二人でよく台所に立っていた。
よく、弁当を持ってくるなんてえらいね～とか、大変だとか言われるけど、
私自身は特にそんな風に思ったことはない。
むしろ、好きなものを好きな味で食べられるので満足だ。

「お、ハナちゃん。旨そう」

同期の田中が声をかけてきた。本店に残る数少ない同期だ。
ちなみに、こいつは元カレで、同期のなかでも特にかわいい子と結婚した。
後から知ったが、二股だったらしい。

「あげないよ～」
「ケチ」
「あーら、見目麗しい奥様にお作りいただいたら？」
「あいつ、料理が下手でさー。やっぱ、ハナちゃんと結婚すればよかった。」

再会してからずっと、こいつはこんなことをぬかす。
妻とうまくいってないのか、はたまた、おばあちゃんの遺産でお金があると踏んでいるのか。
こんな奴と付き合っていた過去をどこか遠くへ放り投げたい。
結婚した後、地方へ行ってせいせいしたのに、４月に異動してきた。
しかも、私の上司だ。
どうにかスルーする。

「ところで、さっきの伝票、ミスがあったよ。」
「え、マジ」
「付箋つけといたから、なおしといてくれる？」
「えー、ハナちゃんなおしてよ。」
「そんな権限はございませんことよ、か　か　り　ち　ょ　う。」
「あいかわらず、固いよなー。」
「そういうところがお嫌いだから、よそさまとご結婚あそばされたんでしょう？」

あんたはどっかで勝手に食べてくればいい。
これで話しは終わりと、切り上げるように食事を再開する。
私の貴重なランチタイムをあんたで無駄にする気はない。

不機嫌そうな面持ちで、外へ出て行った田中を見て、やり込めた満足感が胸に広がった。

しかし、これが私の転機になるとは、思いもしなかった。

3話

その日を境に田中の執拗なイビリが始まった。

ちょっとミスをしようものなら、重箱を突くように叱責される。

それも、ネチネチと長い。

はっきり言って、パワハラだ。

課長は見てみぬ振りで、同僚は知らん顔。

さしもの私も疲労の色が濃くなり、食事が喉を通らない日が増えていた。

いつの間にかスカートが落ちそうなほどやつれていたらしい。

私を叱責する様子は待合から丸見えだ。

おばあちゃんと仲の良かった近所の人も多く利用している。

あまりのえげつなさに店長へ苦情をいれてくれたらしいので、一旦はイビリが落ち着いたものの、ほとぼりが冷める頃には執拗さを増して再開した。

私はこいつに振られて結婚しなかったことを心から誇りに思う。

むしろ、振ってくれてよかった。ありがとう。感謝する。

「っ、聞いてるのか！」

もう、答えるのも面倒だ。さっさと終わりにしてくれ。

「そんなんだから、未だに結婚できないんだよ！」

いや、それ、関係ないし。しかし、よくそんなんで出世したな。
出世したから言いたい放題か？ま、どうでもいいや。
早く満足しないかなー。

「相変わらず使えねえな、上も下も」

急に小さい声になったと思ったら、なんちゅー下らないセリフを吐きやがる。
あまりの寒さにトリハダ立ったぞ。
もういい、堅実な生活さようなら。無職の生活こんにちは。

「あなたが思ってるように私には祖母の遺産がありますが、微々たる物なので生活のためには働く必要があります。それが何か？」
「はぁ？」
「ざっと1千万ほどここで運用していましたが、そんな微々たる資産じゃ使えませんね。お詫びに退職して資金も引き上げます。今から伝票を切りますから、ちゃっちゃと決済してください。それから今から有給休暇を消化させて頂きますのであしからず。それでは皆さん今日までお世話になりました。有難うございます。貴行の益々のご発展をご祈念申し上げます。」

それだけ一気に捲くし立てると、自席に戻って伝票を切り、休暇届けを提出した。
もちろん田中をすっ飛ばして、課長へ。
これを承諾いただけないなら、資産を全額引き上げますけど一との脅しつきで。

実は、生前、ビルを所有していたおばあちゃんの資産は、ゼロが二つ多い。
おばあちゃんが亡くなった後、それを引き継いだ私のところには頭

取直々挨拶に来た。
働きにくくなるのでこのことは黙っているように頼んでいたが、課長の顔を見た限り資産の件を知っていると踏んだ。

しかも、役職を色々引き受けていたおばあちゃんのおかげで、結構顔が利く。
あることないこと言うつもりはないが、私が辞める理由が田中だと知れば、田中個人はは営業しにくくなるだろう。同期のなかではエース級だが、ここで出世はジ・エンドだ。

・・・さぁ、どうする？

課長の頭の中でソロバンを弾いている音がやみ、目で「了解」と伝えてきた。

あとの処理は全て君に任せたよ、課長君。

私は、晴れて無職の身になった。

4話

離れの戸を開ける音がした。
離れは今、幼馴染の健太郎君に貸している。
畳敷きの部屋なので、空手を教えるのにちょうどいいらしい。

「おーい、ハナー。」
「開いてるよー。」
「無用心だな。」
「健ちゃんが来ると思って、空けといたんだよ。」
「それでもお前、鍵かけとけよ。」
「ハイハイ。」

ハイハイじゃねーとかなんとか、ブツブツ言いながらダイニングテーブルに座った健ちゃんにお茶をだす。健ちゃんは2つ上で、平日は親の不動産会社を手伝っている。おばあちゃんが亡くなった後の、不動産関係の手続きは全部健ちゃんがやってくれた。
おばあちゃんが亡くなるひと月前に、名義変更を頼んでいたらしい。手続き完了とほぼ同時に、おばあちゃんが亡くなった。なんか期する事があったのかな？

おばあちゃんが亡くなるまで、私はおばあちゃんがビル成金だと知らなかった。
生活は慎ましかったし、書道教室にはそれなりに生徒さんが集まっていたから、子供の頃はその収入で食べているとばかり思っていた。
今考えると着物や帯はいいものばかりだったので、それに気づかない私がぼんやりしていただけなんだろう。

「それにしても、派手な辞め方したな。」
思わず、ブーっとお茶を吐いた。
「な、なんで知っているの！」
「有名だぜ、昨日の話。」
布巾でテーブルを拭きながら恥じ入る。
一晩たって考えてみたら、あまりに軽率だったことは否めない。
「お前、昔っからそういうとこあるよな。」
「そういうって、どういうところよ。」
「短絡的っていうか、おっちょこちょいというか。」
・・・・まぁ、否定はしない。よくおばちゃんにも諭された。
でも、辛抱したと思うよ？苦情が入るほどのパワハラに耐えたんだから。
「あの、田中っていうのな、支店に飛ばされんぞ。」
「情報早っ。しかも人事の情報なのに。」
「まーなー。」
「いやー、怖いわ。情報保護も何もあったもんじゃないわね。」
「お嬢ちゃんにはわからない、大人の世界のお話だからー。」
「何が、大人の話よ。」
「・・・お前、よくがんばったな。あのパワハラに。」
今、それを言うか。健太郎。不覚にも泣きたくなるじゃない。
お茶のお代わりを勧める振りして、台所へ逃げ込む。
ここは私の安全地帯だ。だれも簡単に踏み込ませない。

「いいにおいしてんな。」

って、おい！簡単に踏み込んでんじゃなーいっ！

「ちょっとー、台所に入んないでよ。」

「イトさんはいいっていってくれたのに、ハナのケチ。」

「そんなこというなら、味見させてやんない。」

「ばーか、お前なんか隙だらけで、簡単に味見できるもんねー。」

言った側からオレンジを空けて、中の里芋を略奪された。

「お、イトさんの味っぽい。」

「おばあちゃんほど美味しくありませんので、今後は味見をお控えください。」

「マズイとは言ってねぇ。」

「旨いとも言ってない。」

「旨い。ハナっぽい味。俺は好き。」

「今更？お世辞は結構です。おばさん達に分けようと思ってたけど、やっぱりやめる。」

噛み付く気満々で健ちゃんの答えを待っていたら、思いがけない提案をされた。

ーーーーーーお前、カフェで働いてみる気ないか？

5話

ーーーーーーーお前、カフェで働いてみる気ないか？

健ちゃんのその言葉に、胸を打ち抜かれたような気がした。

カフェ。なんでだろう、今まで考えたこともなかった。

おばあちゃんはいい顔しなかったけど、安定した職場がよくて銀行に就職した。

おばあちゃんに育ててもらった分、家にお金を入れることしか頭になかった。

でも。でも、本音を言うと。私は調理師になりたかった。

昔から料理は好きだったし、それを仕事にできたらいいなーとは思っていた。

銀行の仕事はそれなりに楽しかったし、別に不満はなかった。

週末におばあちゃんと台所に立つだけでも、十分だった。

ふと、オレンジが目に入った。おばあちゃんの大好きなル・クルーゼ。

大事に大事におばあちゃんが使っていた、オレンジ。

「やる。」

ニヤっと、健ちゃんが笑った。

ちょっと、その顔、チェシャ猫みたいで気色悪い。

「うるせぇ。」

健ちゃんに小突かれた。

＊＊＊

健ちゃんの先輩が駅前でカフェを開きたいと訪ねてきて、物件を何件か紹介して回っているとき、
手伝ってくれる人を探していると言われたそうだ。
すぐに私の顔が浮かんだけれど銀行を辞めそうもないと思っていたところに、昨日の事件だ。
渡りに船とすぐ先輩に連絡したという。

っていうか、事後承諾なんだ。小峰健太郎君。それはちょっと無責任だと思うの、ハナ。

「何が、ハナ。だ。気色ワル。」
「ん？なにか言ったかな？小峰健太郎君」
「とにかく、承諾しただろ。先輩から連絡来るから、話聞けよ。」

後先考えずに辞めたし、こっちも渡りに船だったね。
健ちゃん。ありがとう。

「俺、帰るから。煮物なんかに詰めて。」
「え、持って帰るの。ずうずうしい。」
「仕事を紹介してやったのに、その言い草？」
「おじさんとおばさんの分はあるけど、健ちゃんの分はありませー

ん。」
「俺のことはスルー？お前、だから嫁に・・・」
「結婚して何かいいことあるのっ！？」
くそ、健太郎。いやなこと思い出させやがって。
結婚してもしなくても、最後に女は一人だっつーの。
おばあちゃんも、一人。
おかあさんも男に捨てられて、一人。
近所の一人暮らしのお年よりも、おばあちゃんが大半だ。
だいたい、私が結婚しないのは、アンタが原因だ。
さっさと帰れ。
健ちゃんの分も詰めてあったタッパーを乱暴に渡して、外に追い出す。
なにかをゴモゴモと言っていたけど、聞こえない振りをする。
いい気分も台無しだ。二度と来るな、バカ健太郎。
今度は忘れず鍵をかける。
母屋にも、自分の心にも。

6話

幼馴染が初恋なんて、テンプレすぎて考えたくもない。

しかも、かれこれ３０年近くってどうなの？

３５年の人生の中で、それなりに好きになった人はいる。

でも、一番やわらかいところに健ちゃんが居座っていて、他の人の入る隙間がない。

あの田中と付き合ったのは、健ちゃんを彷彿とさせる間合いだったから。

この人だったら、健ちゃんの壁を破って中へ入り込んでくれるかもしれない期待も大きかった。

それで最後まで許したけれど、ホントに最後の最後でダメだった。

どうにも受け入れられなかった。

だから同期の子と結婚するといわれても、それほどショックは受けなかった。

結局、いまどき３５年経ってもバージンのまま。

健ちゃんと付き合う見込み、ゼロ。

健ちゃん以外の人とお付き合いする見込みも、ゼロ。

結婚するもなにも、そこからだもんな、私の場合。
結婚なんかハードル高すぎるっちゅーの。

健ちゃんこそ、さっさとすればいいのに。
そうすれば、この街から出て行ける。

一人のゴハンは美味しくないね、おばあちゃん。

ずっと、このままなのかな。私。

美味しく出来たはずなのに、味がしない里芋を口の中で転がした。

7話

指定された場所は健ちゃんところの物件で、おじさんが送ってくれた。

かなり改装が進んでいる。オシャレな内装だ。

壁は漆喰のようなものが塗られていて、コテで盛り上げた部分が波のように見える。

テーブルは使い込まれた木の風合いがワックスで光り、それにあわせた椅子も表情がある。

すごく居心地がいい。長居したくなる。経営側には迷惑だけど。

「こんにちは、猪瀬さん？」
「はい。河合さんですか？」
「うん。今日はわざわざありがとう」
「いえ、こちらこそ。あの、言われたポトフ作ってきました。」
「お、可愛い鍋だね。ル・クルーゼだ」
「この鍋、祖母の形見なんです」
「へぇ、おばあ様も料理が好きだったの？」

じゃぁ、こっちへと言いながら厨房に案内された。

こじんまりしているけど、使いやすそうな感じに好感がもてた。

オレンジを暖める。

「前は銀行員だったんでしょ？なんで辞めたの？」
「ケンカです。」
「ケンカ？」
「元カレが上司になって嫌がらせするもんですから、最後にブチギレ。」
「ふぅん。イジメるほど、君に惚れてたんだ。」
「えっ！」
「気づかなかったの！」
「・・・はい」
「そりゃ、相手が気の毒だ」

河合さんが蓋をあけ匂いを嗅ぐ。レードルでスープを掬う。
ポトフは好きで時々作るけど、人に評価してもらうのに作ったことはない。
なんだかドキドキする。

「ん。おいしい。」

詰めていた息を吐く。

「ハナちゃん、他にどんなもの作れるの？」
「えっと、どんなものを作りましょうか？」

カフェでは河合さんの作ったスイーツを出すけれど、ちょっとお腹に溜まるものも出したいらしい。
二人でメニューを考えるのは時間を忘れるほど楽しかった。

「河合さーん」

今行くーと声をかけ、河合さんは私に手を差し出した。

「よろしく、ハナちゃん。僕と一緒にこのカフェを育ててください。」

「こちらこそ！」

「じゃ、また連絡します。」

「はい！」

いやー、こんなにトントン拍子に話が決まって怖いわー。

オレンジを小脇に抱えて自宅へ向かう。

猪瀬ハナ。３５歳。独身。職業、カフェのシェフ。

8話

ところで私の身なりは地味だ。

おばあちゃんは着道楽で着物が大好きだったが、私はさっぱり興味がない。

何度も「オシャレしなさい。」と言われたが、雑誌を見てもピンと来ない。

身長１５０センチ、体重６０ｋｇなら、さもありなんだ。そもそも似合う服を探すのが難しい。

髪は長いのが鬱陶しくて中学生の時に切ったきり、肩より長く伸ばしたことがない。

化粧も粉をはたいて眉を描くのがせいぜい。

受付の時にはとりあえずシャドウだのなんだのやってはみたが、ファンデーションをつけると皮膚呼吸が妨げられる感じがどうにも好きになれなかった。

奥に引っ込むことになったときには、毎朝の苦行から開放される喜びで祝杯を挙げた。

しかし、そんなユルダラっぷりをザックリ斬られる羽目になる。

オーナーの目指すカフェでは、店内も店員もオシャレでなければならぬ・・・らしい。

「ちょっと、ハナさん。おばさんくさっ。もうちょっとマシな格好しなよ！」
「えー、めんどくさい」
「女捨ててる。」
「うん。私、在家出家の尼でいい。」
「はぁ？なにそれ。尼さんがカフェで働いてていいわけ？」
「いいんじゃないのー。職業選択の自由が保障されてる国ですから。」
「だったら、今すぐ尼になれ。寺行け、寺！」
給仕を担当している前川翔がいつものように絡んでくる。
働く時は支給のユニホームがあるし、別に困らない。私服がどうあろうと関係ないじゃないか。
別に翔君とお付き合いしているわけでなし。
「まぁ、でも。ハナちゃんは少し、自分をかまったほうがいいと思うよ。」
「オーナーまで！」
「ハナちゃん、色白いしさ。ちゃんとかまえば可愛くなると思うよ。最近やせたし。」
たしかに。一日中座りっぱなしから立ちっぱなしに激変して、それでなくてもやつれたのに追い討ちかかってなくも、ない。
「・・・・・何着ていいかわからないんだもん。」
「はい？」
「やせたのは最近だし、それまで合う服見つけるのが大変だったくらいで、オシャレとか無縁だったし。何着ていいかわからない。」

「・・・・・・。」
「俺の姉さん、紹介しようか。」
「翔君のお姉さん？」
「隣町で美容師やってる。歳も近いし、たぶんちゃんとオシャレにしてくれる。」
「でも。」
「ハナちゃん、お願いしてみたら。俺、ハナちゃんの可愛くなったとこ、見てみたい。」
「かっ、かわ・・・」
「いいねー。よし、姉さんに連絡してくる。」

なんなんだ、よってたかって。

「ハナちゃんって面白い。顔赤いよ。」

言われなくても、自覚してます！もう、放っといて！！！

「健太郎には感謝だな。店だけじゃなくて、こんなイイ子まで紹介してもらって。」

さあさ、店を再会しよーといいながら、オーナーは表へ出て行った。

ーーーーーーーーどんなに可愛くしたところで、健ちゃんに惚れられるわけじゃない。

中学生の時の、苦い思い出が甦った。

9話

しかして、プロというのは、いやはや。

鏡の中にいるのがもはや自分ではなく、見知らぬ異星人のようで、私は言葉を失った。

はぁぁぁぁぁぁぁぁ。

「どう？似合うと思うけど。」

「私、生きてますよね。」

「はい？」

「いや、あまりの変貌ぶりに、ここは天国かと・・・」

「あなた、面白いわね。」

面白がらせる気は、さらさらないんだけど。

「歳、いくつだっけ？」

「３５歳」

「え、年上！？犯罪だわ、その女の捨てっぷり。そのうえ、色白で肌がモチモチなんて、死刑ものね。」

「・・・・ハッキリいいますね。」

「当たり前じゃない、美容師なんてキレイにしてナンボの商売よ、チャラチャラお世辞言ったところで、キレイになってなきゃ明日から客が来ないもの。」

「そうですね。」

「決めた。服も見立てちゃろ。この後予約入ってないし、出かけるわよ。」

「えっ？」

「せっかくそこまでキレイに仕立てたのに、そんな野暮ったい服着てられたんじゃ、あたしの腕が泣く。どうせ似たり寄ったりでしょあなたの服。」
「はい・・・・」

彼女は、店長ーあたしもう上がるからーと、よく通る声で早退を宣言。奥に引っ込んだかと思うと素敵なジャケットを羽織って戻ってきた。

「何ボーっとしてるのよ。行くわよ。」

私、翔君のお姉さんに会ってから、「はい」とか「ええ」とか一語文以上の会話が成立していないきがする。
そのくらいパワフルで、嵐に巻き込まれたみたいにヨロヨロと彼女に着いていくのが精一杯。

容赦なく近くのセレクトショップに連れ込まれ、これまで試したこともないような服を着せられた。

いやいやムリムリムリムリそんな可愛らしい服なんてと拒否すると、ツベコベ言わずにさっさと着ろ！と恫喝された。

本日2回目ですけど。

しかして、プロというのは、いやはや。

「私の目に、狂いはなかったわ。」

お似合いですぅー、という、ショップ店員の言葉にも嘘は感じられ

ない。
第一、またまた異星人光臨かと思うくらいの変貌ぶりで、言葉もでない。

「・・・似合う。」
「でっしょー、これで私の腕も生きるってものよ。」

そこ？そこなんだ、この人。面白い。嵐のように私を連れまわしておいて、結局、自分の腕自慢するんだ。私の周りにはいないタイプだなー。

「なによ。」
「いや、面白いと思って。」
「さっきまで尼っぽかったのに、生意気ね。」
「素材の良さを引き出していただいて、感謝します。」
「当然ね、私、腕がいいもの。」

どこから湧くのか分からない自信は、確かにオーラになってにじみ出ていますよー。
とは言えず、ニッコリ笑うだけにしておいた。

彼女もこれまたニッコリ笑う。あら、可愛い。

「お礼に食事でもいかがですか？」というと、それなら何か作って欲しいといわれ、こんな愉快なお姉さんを紹介してくれた翔君にもお礼をしたいし、自宅でホームパーティーを開くことにした。

そうだ、ついでにオーナーも招待してしまおう。

心のメモパッドに入力して、彼女と別れた。

１０話

お姉さんと別れた後カフェに寄り、買い物を済ませて自宅に戻った。
途中、どうもジロジロ見られているような気がして、いたたまれない気分でいっぱいだった。
うーん。ビフォーアフターくらい変身したけど、どうも慣れない。
メイクとかなんとか、これから自分でできるのか一抹の不安がある。
離れのほうの出入り口がガチャガチャなって、物思いから覚める。
ああ、健ちゃんが稽古をつけてる日だったっけ。
カーテンを開けて健ちゃんを確認した後、出入り口を開けた。
健ちゃんは口をあんぐり開けて、こっちを見ていた。
「・・・ねぇ。やっぱ似合わない？」
「えっ、やっ。そ、そんなこと、なななないぞ！う、うん。大丈夫、きれいだ。」
「えー、なにどもってんの？」
「や、なんでもない！帰る！」
健ちゃんが顔を真っ赤にして慌てて帰っていくのを呆然と見送り、

食材を冷蔵庫にしまった。

ま、あの健太郎が慌てるくらいの変身ぶりだったんだろう。シメシメ。

けたたましく家電が鳴る。

「はい、いの・・・」

「ハナ！」

「健ちゃん？」

「戸締りちゃんとしろ！いいな！？」

こっちが何か言う前に、ガチャギリ。なんなんだ、いったい。

今度は携帯が鳴る。次から次に。少しは落ち着かせて下さらないかしら？

「ハナちゃん？今話していい？」

「あ、おーなー。はい、大丈夫です。」

「ハナちゃん、ご飯食べた？」

「未だです。」

「じゃぁ、ちょっと出てこない？翔のお姉さんから随分変身したって聞いてさ。見てみたい。」

「いや、ちょっと！なんでそんな情報が！」

「うん？翔から聞いた。」

「ハナさーん。姉さんから写メ来たよー。すっごい、キレイになったじゃん！」

「翔君？」

「そのまんま、家で飯食うのつまんないでしょ？僕らとデートしようよー。」

「と、言うわけだから、今すぐ出てきなさい。待ってるから。」

「はぁ。」

半ば強引に約束させられ、そのまま街へ出た。

＊＊＊＊＊

一方、健太郎はその頃。

ーーーーーー畜生。あれは、勘弁しろよ・・・。なんとかやり過ごしてきたのによ。

ハナの変貌振りには驚いたが、それ以上に危惧することがあった。

あいつは男慣れしていない。しかも妙に金もある。

あいつの人柄なんぞお構いなしで、群がる奴らも増えるだろう。

あいつがそれで泣かなきゃいいが・・・。

田中のように泣かせるような奴が出てきたら、殺せる自信あるな、俺。

そんな物騒な物思いに耽ってることは、ハナは知らずにいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6323y/

しあわせのオレンジ

2011年11月30日10時47分発行